

子どもたちと教育委員会の願いがそろうた



アプローチからみた全景。左端に見える体育館は既存。



昇降口前庭から見る。強い日差しを遮るように、庇などは深く出ている。

古堅中学校のある読谷村は、沖縄本島中部の西海岸に位置する、東シナ海に面した人口約 38,000 人の村で、村内には古跡「座喜味城」や陶芸家たちが共同で登り窯をつくった「やちむんの里」、沖縄の名勝地のひとつ「残波岬」などがあり、歴史と文化、そして自然の豊かなところだ。

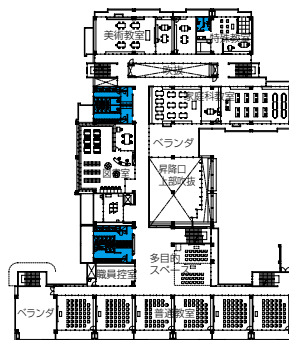
校舎の建て替えにあたって、教育委員会の新里紹伝さんや金城広史さんたちは、自分たちが昔使っていたような 3 K、5 K のトイレではなく、子どもたちが大切に使える、きれいなトイレにしようと、積極的に取り組みました。計画が始まった当時の教育委員会の担当は新里さんでしたが、その後具体化する段階になって金城さんとの 2 人 3 脚となりました。

子どもたちが関わるために 4 回開かれたトイレ検討委員会

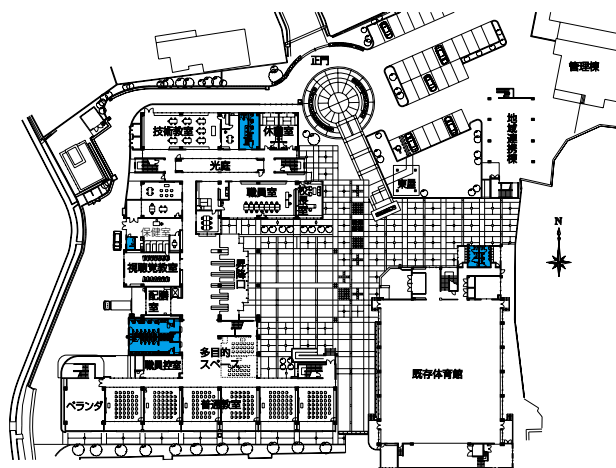
教育委員会では、子どもたちが自分たちのトイレだと思えるためには、行政がつくって与えるのではなく、トイレの計画に子どもたちが関われるようにしよう。そうすることによって、トイレを大切に使う気持ちが育つように考えたのです。

そのためにはまず、自分たちが勉強しなくてはと、福岡県で開催されたトイレセミナーには県庁の人たちと参加し、沖縄・宜野湾でのトイレセミナーにも参加しました。

子どもたちの参加を得るため、古堅中学校にトイレ検討委員会を組織することを依頼しました。教育委員会の



2 階平面図。図面上部は特別教室棟、下部は一般教室棟、その間に管理棟が挟まれた全体配置となっており、そのジョイント部分にトイレが配置されている。



配置図・1 階平面図。 グラウンド

依頼は教務総務課から当時 1 年 1 組の担任だった社会科の古波蔵康美先生に伝えられ、先生は新校舎が完成する時点で 3 年生となり、新しいトイレを使用できる、当時 1 年生の各クラスから 1～2 名の委員を選出しました。

12 名のトイレ検討委員会のメンバーが決まり、委員と教育委員会との間でミーティングが、2005 年の夏休みの間に 4 回開かれました。第 1 回目は「トイレについて感じる」というテーマで、子どもたちにさまざまな情報を提供して、トイレについての印象やイメージを確認し、どんな感じのトイレがいいかをいっしょに考えました。ブレインストーミングの中で行われたやり取りは、みんなで巻紙に書き込みました。

第 2 回目は沖縄新都心にある大型スーパーのトイレを見学し、さらに TOTO のショールームを訪れてトイレの使い方や中学校トイレの特徴、和式と洋式の便器の使い方の違いや清掃性のメリットとデメリット、最新事例の講習を受けるなど、積極的に学校から外に出ていて知識を広げながらイメージを膨らませました。

第 3 回目からは設計を担当した建築設計事務所エー・アール・ジーの設計課長、金城益己さんも加わり、「新校舎のトイレはこうしたい」というテーマで、子どもたちに絵を描いてもらいました。設計事務所はトイレの図面や便器の姿図など、器具配置などを具体的に考える上で必要なデータを提供しました。

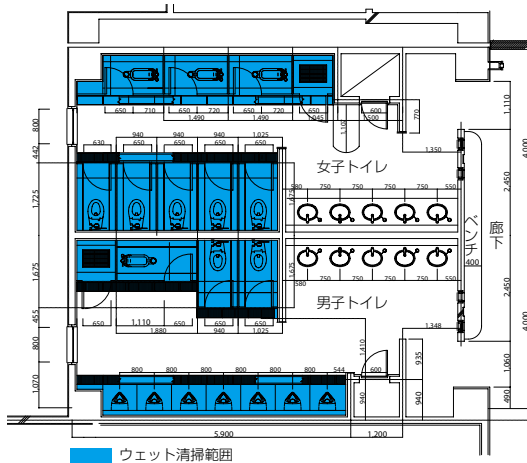
第 4 回目は、第 3 回目に描かれた絵に基づいてエー・



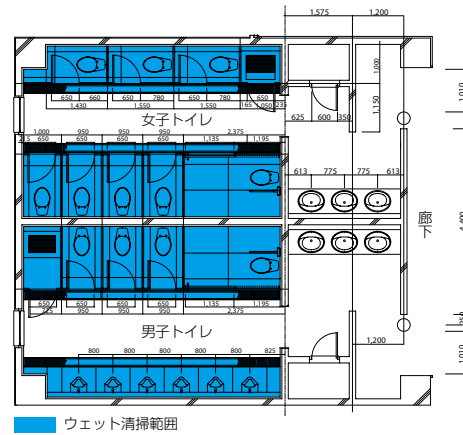
トイレ前は広くとられた多目的スペースで、休み時には子どもたちで賑わっている。



2階トイレの入り口まわり。男女の入り口の間と入ってすぐのところにベンチが設けられている。



トイレ平面詳細図。



アール・ジーの金城さんたちが3D-CADでビジュアル化したものを基に、トイレ内に用いる素材や色彩を検討しました。

教育委員会の新里さんは、「災害時の対策や生涯学習がこれからの学校施設では重要ですので、可能な限りバリアフリーとするのが望ましいのですが、従来のウェット清掃方式ではどうしても段差が出てしまいます。そのため清掃方式はドライにしたいのですが、最終的に決めるのは子どもたちに任せました。そのための下地づくりをしたつもりです」と話します。

子どもたちの望みがバリアフリーとドライ清掃を実現した

このような気持ちが伝わったのか、トイレ検討委員会でも子どもたちからドライ清掃方式が要望されました。それはかなり具体的な理由からで、履き替えが面倒であること、そしてトイレ掃除の時の水が出入りによって廊下まで持ち出されてしまい、廊下が汚れてしまうからというものでした。また、子どもたちから「臭いが出ないタイルがある」という発言があり、これを受けてブースの床や壁に抗菌、防汚効果がある大判タイルが、また尿石抑制システムを内蔵した小便器が採用されることになりました。

いずれも前向きな姿勢でしたし、設計事務所としても、フロアごとに段差をなくすこと、さらにエレベータを1

基設置してバリアフリー対応とすることが検討されていたので、それらがうまくかみ合った結果となりました。

教育委員会からさらなる要望として、いつまでもきれいに使い続けられるトイレであってほしいので、メンテナンスがしやすいように配慮してほしい、普段の居場所となる空間であってもよいのではないか、などが加えられましたが、子どもたちはすでにその問題に取り組んでいたのです。

子どもたちの要望は、明るくきれいで臭いがしないという一般的なものから、さらにトイレ内のBGMへと広がりました。これまでも多くの学校を取材してきて、このような要望がなかったわけではありませんが、ほとんどの場合はコスト面などから割愛されていました。

しかし、ここでは採用が決断されました。担当の先生が学校に来るとすぐにBGMが流れ始め、放課後まで続きます。選曲はふたりの先生があたり、CDを3枚入れて適宜入れ替えているとのこと。また、システム的には校内放送とは別系統となっています。

トイレ内の色彩計画に関しては、設計事務所から4種類が提案され、その中から選択された色が各フロアで用いられることになりました。ところが便器の色に対する子どもたちからのリクエストはかなりカラフルだったため、教育委員会と設計事務所とが協議しながら色を調整しました。おかげで、トイレは明るく落ち着いた、気持ちよい空間となりました。



小便器のわきには水栓が設けられている。壁際からグレーチングまでがウェット清掃の範囲。通路部分はドライ清掃方式と区別されている。



男子トイレ。男女とも以前のトイレの壁面は黒いタイル張りで暗かったが、明るいトイレとなった。

床の清掃方式は、通路部分をドライ清掃が、ブースや小便ゾーンはウェット清掃ができるような床仕上げの二重式とし、それらをグレーチングで見切っています。

安心して使えるトイレは 子どもたちに落ち着きを与えた

ブースの仕切り壁は、子どもたちの要望を反映して天井まで伸ばし、またブースごとに換気扇と照明器具および清掃用の水栓が完備されており、水栓は小便器まわりにもふたつおきに設置されています。トイレは男女同じ場所に設けられましたが、入口はできるだけ離れるように配慮され、入口まわりにはベンチも設けられました。

完成したトイレに対して、トイレ検討委員会のメンバーだった子どもたちからは、「全部が大好き」という最大級のほめ言葉から、「明るくなった」、「広くなった」、「ブースが天井まで届いているので安心」などの声があり、大変に好評です。明るくなったというのは、以前のトイレの壁全面が黒いタイルで覆われていたため、とくに強い印象を与えたようです。1年のときにはいくら洗っても臭いが落ちないし、洗いに良かった。でもこんどのはきれいになるからいい、と清掃性にまで新しいトイレのよさを感じている子どもたちです。

完成してから赴任した比嘉良治教頭も古波蔵先生も、「以前より子どもたちが落ち着きました」と、トイレの改修が子どもたちに与えた効果を実感していました。



女子トイレに限らずブースの中には水栓が設けられた。



女子のトイレ手洗には収納を兼ねたカウンターが設けられている。



多目的トイレ。和洋便器とも床には大型タイルが敷かれて、清掃性をアップしている。



1階、昇降口付近に設けられた多目的トイレは、地域開放を視野に入れて、車いすでも使いやすい広さがとられている。